

電氣泳動研究會設立經過

電氣泳動裝置の普及に伴つて、この實驗が操作條件により異つた結果を示すものである事や、醫、生物學方面の研究者で比較的光學等に詳しくない人々が操作するので、慣れない點がある等の理由からこの裝置を有する研究者が協力して、標準操作法とでも云うべきものを作り又研究結果の交流にも便ならしめたいとの考えから、昭和25年2月3日、日立の小石川俱樂部に東京近郊の研究者が集つて第1回の會合を開いた。この席上、會の名稱として藤井暢三先生の提案により、蛋白泳動研究會を採用する事とし、又取り敢えず電氣泳動法の標準操作法を決定する事を定めた。尙、同日研究會の設立に當つて會則の決定や、諸連絡等に當るため數名の設立準備委員を選んで、會の設立を進める事となつた。

第2回の會合は同年2月15日東大の生化學教室で開かれ、標準操作法としての東大生化學教室案を審議しこれを決定した。本誌上に掲載されているのがこの時決定したものに多少の改訂を加えたものである。更に裝置の設備後、日もまだ淺い研究者も多いので、半年の間において同年の夏に第1回の研究發表會を開く豫定とし、この際には東京近郊のみでなく全國に通知して廣く同好の人を集める事とした。

その後、第1回研究發表會を開くため準備委員は屢々

會合し、時日、内容等の詳細に就て協議の上昭和25年7月8日蛋白泳動研究會の發會を兼ねて、第1回の研究發表會を開いたのである。この際の講演に就ては別掲の抄録を参照して頂きたい。これより先、關西方面でも阪大微研の深井氏、京大生理の細見氏が中心となつて、同様の趣旨の會合が電氣泳動研究會の名の下に行われていたが、7月8日の會の席上で東西兩會が會合して、全國的に統一した會を組織する事が決議され東西兩會から設立準備に當る事になつた。尙、この席上で東大醫學部長、兒玉桂三教授を會長に推薦し、會の名稱は電氣泳動研究會とする事も併せ決定された。

昭和25年11月25日電氣泳動研究會の發會式、第1回研究發表會が開かれた。發會式では會長、特別會員の推薦、會則の審議、決定が行われて電氣泳動研究會は茲にその第一歩をふみ出したわけである。講演數は40に及び、非常な盛會であり本會の前途の洋々たる事を思はしめるに充分であつた。

その後、名古屋地區では名大の豫防醫學教室の岡田博助教授が中心となつて再度に亘つて地方會を開き又九州に於ても地方會が作られる状態にある。

一應全國的な組織の出來上つた泳動研究會がその内容に於て發展するのは今日以後の問題であり、會員諸氏の活躍が望まれる次第である。